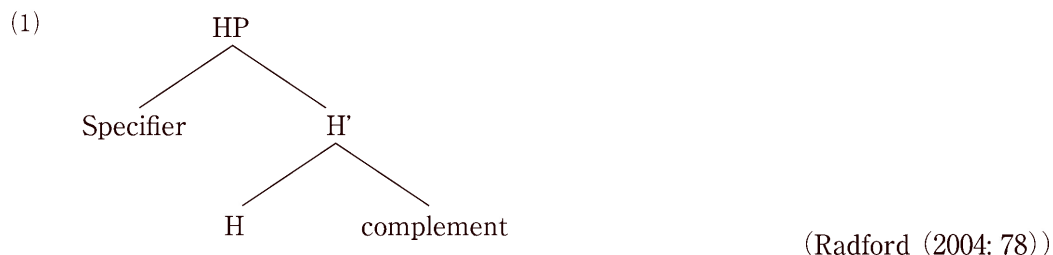


強意接辞「ど」とその関連要素について*

吉田 幸治

0. 序

いわゆる統率・束縛理論 (Government and Binding Theory) 後期の X バー理論に従えば、英語における基本的な句構造は次のような基本骨格を持つものと想定されてきた。



(1)では、常に指定部 (specifier) が主要部 (head) に先行し補部 (complement) が主要部に後続するという英語の語順的特性が示されている。具体的な例として、こうした基本句構造の式形を前置詞句 (PP) に当てはめて考えてみよう。

よく知られているように、英語の強意副詞 *right* は前置詞句を拡張してより大きな前置詞句を形成することができる。

- (2) a. [PP [P' [P on] [DP [D the] [N nose]]]]
b. [PP [ADV right] [P' [P on] [DP [D the] [N nose]]]]
- (3) a. [AP [A' [A beautiful]]]
b. [AP [[ADV very] [A' [A beautiful]]]]

比較的近年の生成文法の用語を用いて説明すれば、前置詞の *on* は限定詞句 (DP) 補部の *the nose* と併合 (merge) することによって前置詞句を形成する (2a)。指定部位置が空の状態でも句レベルまで投射することができるが、指定部に *right* を併合して<指定部-主要部-補部>の全てを利用することもできる (2b)。この場合、指定部に現れる *right* は前置詞 *on* の意味を強める働きを担っており、概略「鼻の真上」といったような意味に

相当する句となる。これは通常の形容詞の場合と並行的であり、(3b) では強意副詞の *very* が指定部の位置に現れて *beautiful* の意味を強化している。

こうした構造を設定するとすぐにわかることは、修飾機能または叙述機能を担う前置詞句と形容詞句では指定部の位置に現れる要素が強意を表す副詞または副詞的要素であることである。当然のことではあるが、CP、IP、TP、VP、DP、NP の指定部位置に現れる要素とは性質が異なっている。

本稿の目的は、同様の分析を日本語の強意接辞と考えられる「ど」に適用することが可能であるかどうかを考察することにある。以下1節では「ど」の振る舞いを観察し、2節では他の強意要素との比較検討を行う。3節では理論に依拠しない一般的な見地から強意要素の中心義について考察する。4節はまとめである。

1. 諸特徴

まず、「ど」が前接する表現の振る舞いについて考えてみよう。なお本稿では考察範囲を限定するために、後続する要素のなかで、名詞として機能するものと基体となる要素に「な」を後続させることで形容動詞の語幹として機能し得るものを中心に考察する。

1.2. 後続要素の制限

筆者が知る限り、強意接辞としての「ど」に関する考察はほとんど行われていない。国語辞典等における記述も多くないが、『大辞泉』には次のような記述がある。

- (4) [接頭] 名詞や形容詞に付く。1 まさにそれに相当するものであることを強調する。「-真ん中」「-ぎつい」 2 ののしり卑しめる意をより強く表す。「-けち」「-下手」

ここで注目すべきは2の記述である。直観的にも理解が容易なことであるが、「ど」が前置される語にはどちらかといえば対象をののしる語が多く、否定的な意味を持つものが結合しやすい傾向にある。いくつか例を挙げる。¹

- (5) a. ど阿呆
b. どチビ
c. ど近眼
d. ど助兵衛

- e. ど淫乱
- f. ど変態
- g. どブス
- h. ど短気

(5)の例から明らかなように、「ど」が前接し得る語には否定的な意味合いを持つものが多く、しかも漢語と和語による結合上の差異も見られない。

しかし、当然のことながら全く制限がないわけではなく、次の(6)のように否定的な意味を持つ語であっても結合が許されない事例も多い。

- (6) a. *ど悲惨
- b. *ど不潔
- c. *ど失礼
- d. *ど稚拙
- e. ?どマヌケ
- f. ?どスカタン

また、『大辞泉』の1の記述にもあるように、「ど」が単なる強意要素として機能し、文脈がなければ否定的とも肯定的とも判断できない結合も少なくない。

- (7) a. ど根性²
- b. ど派手
- c. どデカイ
- d. ど短期 (のバイト)
- f. どピンク (のドレス)

ここまでの観察をまとめると、次のようになる。

- (8) a. 「ど」に後続する語に漢語・和語・外来語等による制限はない。
- b. 「ど」に後続する語には否定的な意味を持つものが多い。
- c. 「ど」に後続する語は否定的な意味を持つものに限られるわけではない。
- d. 結合の容認性には方言差・年齢差などが関与する。

1.2. 音韻的制約

次に音韻的側面について考察してみよう。

別宮 (1977) が先鞭をつけ、その後の音韻論研究において定説となっていることであるが、日本語には文字数が単位とはなっておらず、休止を含めた拍 (モーラ) をもとにしており、これを基準とした音韻上の制約がある。具体的には、日本語では2拍を1単位とし、これを2倍にした4拍子が基本単位となり、これがもっとも好まれるまとまりとなっている。さらにこの4拍子を2倍にすれば8拍子になる。俳句や短歌なども、表面的には五七五 (七七) となっているが、休符を考慮すれば八八八 (八八) となる。

具体例として (5a) を見てみよう。(5a) では「ド」「阿」「呆」がそれぞれ一拍ずつ計三拍となるが、現実の発話においてはこの直後に一拍を加えることになる。(5a) のみを数度繰り返して発音することでこの休符が理解されることと思うが、休符を置かずに発話するとかなり不自然になる。

これは、日本語としての言いやすさということにもなるが、(5) と (7) でみた表現のほとんどがこの制約を満たしている。つまり、「ど」と休符を含めた全体が4拍からなる表現となっている。他方、(6f) から明らかなように、音韻制約を満たしていないものは容認性が低くなっている。

もちろん、注1で触れた「どぐされ」のように音韻的な制約を満たしていないにも関わらず容認される例も皆無ではないが、これはやはり例外であろう。なぜなら、基体となっている「腐れ」という語そのものが、他の例とは異なり形容動詞の語幹としての機能を果たさないからである。

一方、注2で触れた「ド忠犬」という表現は必ず直後に休符一拍を必要とし、休符を含めて4拍になっており、もっとも好まれる単位となっている。

したがって、音韻的な制約は絶対的なものではなく、出力に対して緩やかに働くものであると考えられる。こうした制約は、まだ推察の域を出ないが、Woisetschlaeger (1980) が語順に関わる音韻規則について主張している「統語論の自律性」を支持する証拠が形態論のレベルにおいても観察される例として考えられるかもしれない。この点に関して、現時点では考察が不足しているので考察は別の機会にゆずることとする。

1.3. 統語的制約

「ど」の生起に関係しては、純粹に統語的な制約や規則というものはない。敢えて取り上げるとすれば、次のような選択素性が想定できる。

(9) do: PREFIX [+__DP/AP], [+__ [+ degree]]

(9)はどちらかといえば意味に属する制約であるが、次の二点を示している。つまり、(i)「ど」は接頭辞であり DP または AP が後続する、(ii)後続する要素は程度を持つものである、という二点である。

ここで注意しておかなければならないのは、(ii)における「程度」の解釈である。元来、英語の *very* のような強意要素は形容詞と副詞を強調するものであるが、このことは「ど」にも当てはまることである。つまり、(5b) (5c) のように、個々の名詞・形容動詞が持つ属性そのものに対する程度と考えられるものもあれば、(5d) – (5f) のように、名詞によって指示される個体の行為の程度に関するものもあるからである。表意文字を有する日本語では漢字一文字で表わされる要素であっても属性表現の機能を有しており、それが複合語の一部として存在することがあるためにこうした現象が起こっている。換言すれば、「ど」によって修飾される意味成分は名詞全体に限られるものではなく、その語彙によって指示される個体の属性または個体の行為の一部なのである。

ここでより重要な問題についても考察しなくてはならない。³本稿で考察している「ど」は大辞泉の記述にもあるように、あくまでも接頭辞であり、独立した語彙とはいえない。したがって「ど」を組織的に処理する場合には形態論の問題となる。他方、英語の *right* は独立した語彙であり、純然たる統語論の問題として議論されるものである。つまり、形態部門と統語部門を峻別する理論においては同列に論じることができないことになる。

しかし、Hudson (1990) が唱道する依存文法の一つである Word Grammar や Langacker (1987) を代表とする認知意味論の立場では、形態部門と統語部門の区別はあくまでも便宜上のものであり、表層的な区別を示すものに過ぎないとされる。また Di Sciullo and Williams (1987) では統語部門に見られる諸規則・諸制約が形態部門においても大部分適用可能であることが示唆されている。したがって、日本語の「ど」と英語の *right* を同列に論じることが、必ずしも外的外れな見解ではないと思われる。とりわけ、その背後で働く概念上の作用に関しては多くの類似点が見られるのであり、語形成のレベルで働く概念操作と統語部門で働く操作に平行性が見られることも自然なことである。

こうした側面を技術的に論じることが不可能ではないが、紙幅の都合もあり、詳細な記述は別の機会に譲ることとする。⁴

2. 他の強意副詞との比較

前節までの議論で「ど」の特性はある程度まで明らかになったので、ここで他の強意副

詞との比較検討をしておこう。

2. 1. 「くそ」

「ど」と意味的な類似性を示すのが「くそ」である。『大辞泉』には次のような記述が見られる。

- (10) [接頭] 名詞および形容動詞の語幹、形容詞などに付く。1 卑しめののしる意を表す。「一坊主」 2 程度のはなはだしいことをのしる意を表す。「一いまいましい」「一まじめ」「一力」

(10)の記述は(4)でみた「ど」に関する記述とかなり類似している。しかし、実際の共起関係をみてみると重なる部分は少ない。次例をみられたい。

- (11) a. くそ暑い
b. くそ眠い
c. くそだるい
d. くそババア
e. くそゲー⁵
f. くそ教育委員会⁶
g. くそ丁寧
h. くそ親切

まず注意しておかなければならないことは、「ど」はいわゆる拘束形態素 (bound morpheme) であるが、「くそ」はもともと名詞の「糞」が強意副詞として転用されてそれが固定した表現であり、自由形態素 (free morpheme) としての性質を残している点である。つまり、「くそ」は文字通りの「糞」の意味があり、それが「糞のような」という直喩が一般化し、これを基本として程度の大きさを表す表現になったのである。

また多くの例では「糞のように忌み嫌うべきどうしようもない存在」であることを示している。つまり、「ど」はいかなる要素が後続しようとも程度の強さを表す機能しか持たないが、「くそ」の場合は後続要素が形容詞の場合にのみ強意副詞として機能している。

したがって、「ど」とは異なり「くそ」は後続要素との結合様式が複数存在することになる。

2.2. 「めっちゃ」

比較的新しい強意表現に「めっちゃ」がある。これは程度表現として広く用いられていた「めちゃくちゃ」の前半部分のみが残り、音韻上の要請が働いて促音化されたものである。

この表現も形容詞が後続しやすいという点において「くそ」と類似しているが、使用範囲は「くそ」よりも広い。発音する場合、「めっちゃ」の直後にはポーズを置くことが多く、おそらく後続要素との結合度が低く独立性が高いからであろう。実際、結合度を高めるための手段として促音化していない「めちゃ」という表現も多用される。

- (12) a. めっちゃ暑い→めちゃ暑い
 b. めっちゃ臭い→めちゃ臭い
 c. めっちゃ眠い→めちゃ眠い
 d. めっちゃババア→めちゃババア
 e. めっちゃケチ→めちゃケチ
 f. めっちゃ丁寧→めちゃ丁寧

2.3. 「ばか」

「ばか」は文字通りの「馬鹿」という意味も強く残っているが、程度が大きいことを表すのが中心義である。主として事物の大小に対して用いられる。

- (13) a. ばかでかい
 b. ばか正直
 c. ばか騒ぎ
 d. ばか丁寧

(13)からも明らかなように、「ばか」の直後には肯定的な意味を持つ名詞が現れやすい点の特徴として挙げられる。

2.4. 関連表現のまとめ

ここで挙げた全ての強意表現に後続できるのは「でかい」である。

- (14) a. どデカイ
- b. くそデカイ
- c. めっちゃデカイ
- d. ばかデカイ

これはおそらく「でかい」という形容詞はいわゆる無標 (unmarked) の表現で漠然とした大きさを表すため、意味的な制限が比較的ゆるいからである。反意語の「小さい」は有標 (marked) なため、こうした修飾関係は認められない。

一般に、一般的な意味を持つ語彙は制約を受けにくく、様々な操作が可能となるが、修飾語と被修飾語の間に見られる関係においてもこうした傾向は観察されることであり、「でかい」もそうした傾向を反映していると考えられる。

3. 中心義の考察

認知言語学的視点を採用するまでもなく、ほとんど全ての語彙には中心義があり、その意義が放射線状に広がっている。国広 (1967) はこうした試みの嚆矢である。

Bolinger (1977) は “One form for one meaning, one meaning for one form” という立場から「全ての言語要素には存在理由となる独立した意味がある」という主張を行っているが、この見解は強意要素全般に関してもある程度まで当てはまるはずである。

こうした観点を踏まえた上で、前節までの議論をもとに中心義を示すことにすると、次のようにまとめることができる。

- (15) 「ど」の中心義： まさに、本当に
- (16) 「くそ」の中心義： どうしようもないほど
- (17) 「めっちゃ」の中心義： とても
- (18) 「ばか」の中心義： 限度がないほど

(15)–(18)は単なる言い換えではないことに注意されたい。可能な限り中心義を反映したものを選んではいるが、ある語の語義は他の語義と一対一対応をするものではないので、説明として便宜上与えているものである。

大規模なコーパスを用いて適切な検索を行えばより正確な検証が可能であるが、本稿で扱った強意要素はそれぞれ独自の意味ネットワークを成しているはずであり、(15)–(18)の記述はそのきっかけとなるはずのものである。

4. むすびにかえて

全ての言語表現は人間の認識様式の反映であり、強意修飾要素も例外ではない。

英語を例として考えてみれば明らかなように、多くの強意副詞はいわゆるののしり語 (swear word) が転用され、それが発展したものである。

- (19) a. shitting pretty (めっちゃカワイイ)
- b. fucking nice (とっても素敵)
- c. damn-fool (極めて愚かな)

日本語の場合でも「ばか」「くそ」といったあまり上品とはいえない語が転用されているが、この点において人間の認識様式の普遍性が反映されているといえよう。ののしり語的なものは強意表現へと転化されやすいのである。

では「ど」とはどういう認識作用なのであろうか。これは(15)で示したように、中心義は「まさに」というようなものであり、これは見事に英語の *right* に対応している。*right* の中心義は「正しい」であり、「まさに」も漢字を用いると「正に」となり、日英語間で見事に呼応しあっている。日本語の「ど」と英語の *right* がともに指定部の位置に生じる要素であるのは単なる偶然ではないのである。

残された課題は大きいものであり、とりわけ 1.3 節で述べた概念上の問題点は重要課題であるが、これは稿を改めて論じるべきものと考え、いったん稿を終えることにする。

注

* 指摘された全ての問題を改善することはできなかったが、本稿脱稿後に小野創氏から有益かつ広範な批評・意見をいただいた。ここに記して感謝する。また平井大輔氏からも励ましとともに助言をいただいたことにお礼を申し上げる。

1 (5)には挙げていないが、九州北部を中心に使用される表現に「ど腐れ」という固定した表現があり、「性根が腐り切っている」という意味で用いられる。連濁を起こしている点でも興味深いこの表現は、1976年から『月刊少年ジャンプ』誌上に連載された野

- 球漫画『どぐされ球団』（竜崎遼児 作）で広く知られることになった。なお、竜崎遼児氏は長崎県の出身である。
- 2 この表現も吉沢やすみによる漫画『ど根性ガエル』によって広まったものであると考えられる。漫画のタイトルでは「ど」を含む表現が好まれる傾向あるようで、早世した谷岡ヤスジ作の『ヤスジのド忠犬ハジ公』も「ど」を含んでいる。
 - 3 この問題は筆者も気づいていたが、小野創氏の指摘によってより明確になった点である。
 - 4 語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure, LCS）またはある種の語彙分解（Lexical Decomposition）に類似する表記を利用することになるが、形態論的考察も含めたものになる。
 - 5 「まったく面白くないつまらないゲーム」のこと。
 - 6 2008年9月7日に橋下徹大阪府知事がコミュニティーFMの公開生放送において行った発言。

主要参考文献

- 別宮貞徳. (1977) 『日本語のリズム』. 講談社.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. Longman.
- Hudson, R. (1990) *English Word Grammar*. Blackwell.
- 国広哲弥. (1967) 『構造的意味論』. 三省堂.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. University of Chicago Press.
- Langacker, R. (1987) *The Foundations of Cognitive Grammar: Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- 松村明 (監). (1998) 『大辞泉』 (増補・新装版). 小学館.
- 日外アソシエーツ編集部 (編). (1997) 『漫画家・アニメ作家人名事典』. 日外アソシエーツ.
- Radford, A. (2004) *Minimalist Syntax*. Cambridge University Press.
- Di Sciullo, A.M. and Williams, E. (1987) *On the Definition of Word*. MIT Press.
- Woisetschlaeger, E. (1980) "A Note on the Autonomy of Syntax", *Journal of Linguistic Research* 1, pp. 55-70.